

給へリ、木曾ハ散飯ノ外ニハ何モ残サズ食畢、戯呼猫殿ハ少食ニテオハシケリ、去ニテモ適座シタルニ、今少搔給ヘカシクト申、其後根井、猫間殿ノ下ヲ取テ中納言ノ雜色ニ給、雜色因幡志腹ヲ立テ、我君昔ヨリ斯ル淺猿キ物不進トテ、厥ノ角ヘ合子ナガラ抛捨タリ、木曾ガ舍人は見テ、穴淺増ヤ、京ノ者ハナドヤ上臍モ下臍モ物ハ覺ヘヌ、アレハ殿ノ大事ノ精進合子ヲヤトテ取テケリ、

〔守貞漫稿後集一〕飯

江戸ハ朝ニ炊ギ、味噌汁ヲ合セ、晝ト夕ベハ冷飯ヲ專トス、蓋晝ハ一菜ヲソユル、菜蔬或ハ魚肉等必ラス、午食ニ供ス、夕飯ハ茶漬ニ香ノ物ヲ合ス、京坂モ朝食ト夜食ニハ冷飯、茶、香之物也、蓋三都トモ、右ニ云ハ概略ニテ、其專多キモノ也、略○中

又京坂ハ未刻比ニ、八ツ茶ト號ケテ所謂點心ヲ食ス、蓋短日ニハ不食之、永日ノ比ハ專ラ食之、多クハ茶漬飯ヲ食スモアリ、江戸ニテハ、三時ノ外ニ例トシテ食スコト無之、

〔永正九年日々記〕三月五日、同日に御口傳在之、飯ニ毒の入たるかと思ふ時は、飯ニソツト我息をシカケテ見レバ、其飯則黄色ニナル、然レバ毒入ルト思フ也、飯ノ汁毒入ルト思フ時ハ、則ハシノサキニ其汁ヲ付テ、我身ノ上ニ置テ見ルニ、其汁則ヒルハ毒有リ、則カハカヌハ毒ナシ、飯汁トモニ前ノ如ク無キハ、自然毒入ルトイヘドモ、一段ドククル事ナシ、則藥ヲ用テ吉、

〔還魂紙料下〕慳食

今の俗噴恚の強事にいふは誤りにて、慳食は^{シヤ}慳こと也、されば蕎麥切にもあれ飯にもあれ、盛切テ出し、かはりをもち、めざるをけんどんといふなり、略○中

慳食飯 江戸鹿子、略○中 又國花万葉記、元祿十年印本京三條繩手茶屋慳食弁當とあるもおなじものに

て、他所へ持行ゆゑの名なるべし、